

好日の記

牧野信一

青空文庫

一

わたしは昨今横須賀に住んでゐるので、映画などを見たいときは湘南電車で、横浜へ出かけるのであつた。ながい間の酒の習慣を、止むなく禁じなければならない健康状態から、恰度この一年ばかりの間、あちこちの田舎に移り住んで、夕暮時のてれ臭さとたゞかひつゞけてゐたわけだつたが、さう軍艦や飛行機ばかりにうつゝを抜かしても居られず、そんな健康的な軍港に移つても、灯のつく時刻になると、手もなく身柄を持ちあつかつた。こんな心持は馬鹿々々しいと申せば、それぎりだが、ある種の飲酒常習者^{センチメンタル・ウエツト}には容易く心底から同感出来るであらう——この歎きこそ、正しく知る人ぞ知るに相違ない。

その日は、朝からうらうらとした長閑な日和で——さうさう、わたしの田舎の遊んでばかり居るある友達で、ひとの顔さへ見れば、何かしら理由をつけて、例へば、つまり、女房が癪にさはつたから——とか、友達にだまされて口惜しいから——とか、あまり金がなくつてムシヤクシヤしてしまつたから——とかと、少々落語の主人公泌みるはなしであるが、ほんたうにそんな風に、何かしら理窟をつけて飲まずには居ない男だつた。ところが

或る日、わたしと出遇ふと、何う彼があたまをひねつても、癪にさはることも、悲しいことも、嬉しいことも——何んな類ひの理由も見出せなかつたある長閑な一日、彼はひどくてれて（さういふ男に限つて、白面だと無性に内氣に似た無口であるものだ、そしてわたしもやゝその種族であるが——）眼を白黒させてゐたが、やがて、

「いや、どうも……けふは、あんまり好い天気だから、まあ、ともかく、一杯やらうぢやないか！」

と理窟をつけたのである。わたしも、その時には思はず笑ひ出して、賛成したものだつたが、その彼の言葉は妙にいつまでも、はつきりと残つてゐて、あまり好い天気に出会ふときつと、それを思ひ出して苦笑を誘はれるのであつた。

恰度そんなことを思ひ出して、わたしにも稀には何の悲しいことも嬉しいことも、癪にさはることもない好い天気の日があつて——そこでわたしは断然たる禁酒家であるために、ついふらふらと和やかな陽を浴びて散歩に出るのであつた。わたしは、あの男の言葉を思はず口真似して、何やらなつかしささへ覚えてゐた。

「横須賀中央」といふ駅から、日の出町までの切符を買つて、わたしは何気なく、いつも湘南電車に乗つたのである。円タクにでも乗つて、あてどもなく海岸通りなどをまはり、

春霞みを衝いて出てゆく船を眺め、ゆつくりと支那料理屋にでも休んでから、夜はまたひとりでオデオン座の特等席になりとをさまつて、居眠りでもして来ようといふやうな、何とわたしには全く珍しい「好日」には違ひなかつたのである。ところが、そんな変竹林に、和やかさうな顔つきで、湘南八景あたりの、窓にうつる明るい小山などを眺めてゐるうちに、不図わたしは、やはり、ひとりが、堪らなく、厭！ になつて来た。といふのは、爽やかな友達のある東京へ行かずに居られなくなつたのである。直ちにわたしは、車掌に訊ねて、はじめての経験である乗越なるものを申出たのであつた。

二

この電車で乗越すか、それとも省線に乗換へるか？ と車掌がいふので、わたしは省線の方が速いだらうと思つたから、さう答へると車掌は、では横浜で——と、五銭で乗換切符を渡し、若し車内でその暇がなかつたら、降りる時に精算所で勘定すればよろしい、こつちでは省線までの間で、向方は向方となるんだから、新橋までの乗越は、こつちの乗越切符だけを示して向方で払ふやうにと、極めて親切に教へてくれ、わたしはどうも有りが

たうとあいさつせずには居られなかつたほどだつた。で、わたしは横浜で省線の東京行に移つて、なるべく車内で車掌に申出ておかうときよろきよろしてゐると、発車して間もなく、えゝ、おそれ入りますが、乗車券を拝見——といひながら、眼の細い角頤の車掌が入つて来たので、わたしは恰度よかつたと思つて、慌て、すゝみ出て、これで新橋まで——といったのである。するとその細眼は非常にはげしい眼ばたきをして、切符とわたしの顔を等分に凝つと見くらべてゐたかとおもふと、口の端に薄気味悪いワラヒを浮かべて、

「慌てたね！」

と、頤をしやくつた。

「えゝ、慌てた……」

わたしは、ほんたうに慌てゝ差出したのでさう応へた。すると彼は、厭に片目を嘲りの如く一層細めて、

「フ、ン、気がとがめたんだね。まあ、こつちへ来て——」

とマントの袖をつかんで車掌室へ引いた。そして凡ての経過から、身分、行先をしらべた。

「務め先は？」

「務めてはゐない。」

「キセルをやつてゐるね。あつさりと白状してしまひ給へよ。」

「僕、キセルでなんか、煙草を喫はないよ。」

「——ふざけ給ふな。出してしまへよ。隠すとなると、おんびんには行かないからね。」

「ほんたうに、僕、キセルなんか隠してはゐないよ。うちでだつて煙管なんてものはつかつたためしもないし、電車の中に持つて来て喫ふ筈はないぢやないか。」

あまり馬鹿々々しいので、わたしはつい笑ひ顔を浮べた。

「まさか、阿呆ぢやないんだらうな。」

とその車掌は、もう一人の、これは温厚さうな別な車掌にさゝやいた。そして、二人はちよつと首をかしげてゐた。——その時、聞かされたまで、わたしはキセル乗りといふテクニツクを、まつたく知らなかつたのであるが、全く後になつて見ると、わたしのその時の様子は、図々しいのか、阿呆なのか？ わからぬも道理だつたらうとなづかれた。つまり彼は、わたしが、日の出町から横浜までのたつた五銭の切符を買つて、中途はキセルの管の如く、そして、後先だけをわづかに金をつけてゐるといふわけで、行先の短い間の定期券か何かを所持してゐるであらう——とにらんだのである。そして、さういふ不正乗

客を検べるのが生等の職業であるから——と追及して、一層嫌疑を深めた。さう聞くと、疑はれるのも無理はなかつたと気づき、わたしは、急に自分が非常に悪い奴のやうに見られることの当然さから、申し開くすべもなく、ぼんやりしてしまつた。

「務めもなく、ぢや一体、何しに新橋まで行くのかね？」

「あてもなく、たゞぶらりと……」

三

「呆けるのも好い加減にしたまへよ。こゝまでにらまれたら、白ばつくれたつて、可笑しくつて。」

「……………」

わたしは、ぼんやりと窓の外を見て、何か他のことを考へてゐた。

「今日だけは、大目に見ても好いから、まあ、あつさりと定期を出してしまつたら？」

「……………」

更に疑ひを深めたことには、その時わたしの膝がしらは、空しい不幸の悲しみから、が

くぐくとふるへ出してゐたのである。勿論彼等はいよいよ悪党が切端つまつて、鼠に化けようといふ段に差し迫つたらしいと、見込んで、

「おいッ！」

と、ひとりがわたしの肩をつかんだ。わたしも、たしかに驚いて思はず——オイッ！
とうなつて、ちよつと軽く、飛びあがつたやうであつた。

「臆病な癖に、大それた、ケチな真似はしない方が好いよ。」

と角頤が声を立て、憎々しく笑つた。

「うるさいッ！」

わたしは思はず叫んだ。

「へえ……」

と彼は、皮肉にわたしの眼を見つめてゐたが、忽ちきつと形相を変へて、

「よしッ——ぢや、新橋で一緒に降りよう。止むを得んから、駅長、立会ひの上で身体検査だ。好いかッ！」

と怒鳴つた。——おゝ、わたしは、このとき、実に吻ツとして、

「何だ、ぢや、いつそ、はじめからさういつてくれゝば好かつたのに——厭なおもひをさ

せられたものだ、ハ、ハ、ハ、ハ。」

兎角、裸になるといふものは愉快なものだ。小説などを書く場合、すっかり裸になりきつてゐるつもりでも、つい、あとから見ると、やはり何かを着てゐることが目につくものであるが、そして、それはカーライルの哲学の本を開くまでもなく、止むを得ないことは相違ないが、生きることの厄介さには、誰しも屢々吐息を衝きがちなものであるが——わたしは、そんな妄想に走り、泥酔をしても裸になるといふ癖もない自分が、白面で検査官の前で裸になるといふことは、おそらく徴兵検査以来のこと——など、無性に素晴らしい興奮にさへ走つた。

「行かう、行かう。僕、腕はこんなに細いけれど肉体は相当だよ、酒を止めたら、十二貫半にも増えたぜ。」

いつかわたしは、相手も忘れて、親しい友達にでもはなすやうに浮き立つた。

「わからんね。」

角頤が、Bの車掌にさゝやいた。

「わかつたね。」

とBがうなづいた。するとAが、

「いや、失敬——」

と、わたしにいった。「ぢや、まあ、もう新橋だから——」

とそれで終りであつた。歩廊から振り向くと走り出した窓から、Bが凝つとまだこつちを見てゐた。するとわたしは、新しい不愉快が巻き起つて、その顔を睨め返してゐたが、改札口を出ると、直ぐに、横須賀行の切符を買つて、直行の省線に乗つた。久し振りで、二等車の窓から、まだ明るい、好すぎる程の天氣の空を眺めた。

青空文庫情報

底本：「牧野信一全集第五卷」筑摩書房

2002（平成14）年7月20日初版第1刷

底本の親本：「報知新聞 第二〇九一〇号、第二〇九一一号、第二〇九一二号」報知新聞社

1935（昭和10）年3月20日、21日、22日

初出：「報知新聞 第二〇九一〇号、第二〇九一一号、第二〇九一二号」報知新聞社

1935（昭和10）年3月20日、21日、22日

入力：宮元淳一

校正：門田裕志

2011年8月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

好日の記

牧野信一

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>